

2 学年通信

新宮町立新宮東中学校
令和8年2月27日 第94号
文責:江頭 俊輔

[司馬遼太郎さんを知っていますか?]

みなさんが定期考査に励んでいた2月12日は、歴史・時代小説作家の司馬遼太郎さんが亡くなってちょうど30年でした。「歴史が好き」、「日本のことを詳しく知りたい」という人には是非おすすめです。と言いつつ、江頭も本は持っていますが、まだ読み終えたことはありません。映画化やドラマ化されている作品も多いので、是非、そちらから触れてみるのをおすすめします。では、まず司馬遼太郎さんの紹介を少し。

- ・1923年大阪生まれ
- ・新聞記者を経て『梟の城』で直木賞を受賞
- ・『竜馬がゆく』『坂の上の雲』『燃えよ剣』など日本の近代化や幕末、明治を描いた作品で有名。



[坂の上の雲]

私が初めて司馬遼太郎さんの作品に触れたのは、高校生のときに放送されていた『スペシャルドラマ 坂の上の雲』を視聴したときです。それまでは「歴史」は、授業で学ぶもの。地理よりは面白いけど、英語よりは得意ではないもの。と思っていました。ただ、このスペシャルドラマの『坂の上の雲』はとても面白かったです。明治という時代の背景や日本人がどういう思いで日清・日露戦争に臨んだのか、そしてそれはどういう結果になったのか、をととても分かりやすく(すごく長編のドラマですが、)理解することができます。私が『坂の上の雲』で素敵だと思ったのは、なんととってもそのドラマの冒頭です。

まことに小さな国が開化期を迎えようとしている。「小さな」といえば、明治初年の日本ほど小さな国はなかったであろう。(中略) この物語は、その小さな国がヨーロッパにおける最も古い大国の一つロシアと対決し、どのように振る舞ったかという物語である。(中略) 彼らは明治という時代人の体質で、前をのみ見つめながら歩く。のぼっていく坂の上の青い天に、もし一朵(いちだ)の白い雲が輝いていれば、それのみを見つめて坂を上っていくであろう。(坂の上の雲/司馬遼太郎)

明治時代がどれだけ前向きで陽気で、活気に満ちていたのか、冒頭を読むだけで少し分かる気がします。『坂の上の雲』の主人公は、四国伊予松山(現在の愛媛県)出身の秋山真之(さねゆき)【日本海軍に所属し、日本海海戦でバルチック艦隊と対決する作戦を考え、それを実施した】、秋山好古(よしふる)【日本陸軍に所属し、史上最強と呼ばれたコサック師団を破る奇跡を遂げた】、正岡子規【「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」で知られる、俳句短歌などの中興の祖となった】という3人と明治を生きた人々全員です。

この物語の中で取り上げられている私がとても気に入っている正岡子規の句があるので、紹介します。親友である秋山真之が日本海軍への入隊を決め、正岡子規と離ればなれになる際に真之に送った句です。

いくさをもいとはぬ君が船路には 風吹かば吹け 波立たば立て

簡単に言うと「何があっても自分の決めた道を進もうと決心したのだから、風が吹くなら吹け、波が立つなら、立て、それでも進んでいけ」という意味でしょうか。「何があっても大丈夫。」そんなメッセージが風や波などのイメージしやすい言葉を使って婉曲的に表現されているのもおしゃれです。

私たちもいよいよ3年生です。まさに開化期を迎えようとしています。みんなでのぼっていく坂の上の青い天には、白い雲(受験?めざす姿?)が輝いているはず。それのみを見つめて上っていきましょう。

受験をもいとはぬ君が船路には 風吹かば吹け 波立たば立て